御霊神社

【東陣】

御霊神社の歴史は、京都が日本の首都になった 794 年にまでさかのぼります。当時即位していた桓武天皇（735～806 年）は、皇居、ひいては国を守護するために神社の建立を命じました。

また、この神社は非業の死を遂げた人々の魂を鎮める役割も担い、その対象には権力闘争の結果追放され、御霊神社建設の 10 年前に亡くなった桓武天皇の弟も含まれていました。古代の日本では、人生における不当な仕打ちに苦しんだ人々の魂が、その加害者に復讐するため戻ってくるがあると信じられていました。

建立から 6 世紀が経った頃、神社周辺の森で争いが起こりました。この事件は応仁の乱（1467～1477 年）の始まりと考えられています。応仁の乱は、将軍の後継者をめぐる争いとして始まりましたが、京都の大部分を荒廃させる全面的な内乱へと発展していきました。

御霊神社は 16 世紀後半に再建され、皇室だけでなく京都の人々も守護する役割を担うようになりました。この時代の名残を留めているのが神社の南門です。この門は、武将であり関白であった豊臣秀吉（1537～1598 年）が本拠地としていた伏見城の一部でした。

御霊神社にとって最も重要な年に一度のお祭りである御霊祭が開催される 5 月 18 日は、境内に最も人が集う日です。この祭りの期間中、普段は拝殿に置かれている神輿が行列によって運ばれ、御霊神社から京都御所までの間を往復します。